

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 編集後記  |
| Sub Title        |   |
| Author           | 深海  |
| Publisher        | 慶應義塾経済学会  |
| Publication year | 1965  |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.5 (1965. 5)  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650501-0153">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650501-0153</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

次号目次

論 説

近世前期における「経世済民」論の展開……島崎隆夫

——山鹿素行の場合——

社会主義経済建設における

後進国型とその中国的展開(三)……平野絢子

農家計構成員の

労働供給スケジュール(II)……島居泰彦

——常住世帯員男子・女子グループ別の計測——

学 界 展 望

日本の近代化……中村勝己

書 評

高橋 洗著

『日本の労資関係の研究——「企業別組合」の

構造と機能を中心として——』……飯田 鼎

新刊紹介

前号目次

論 説

社会主義経済移行の物質的基礎と

——しての国家独占資本主義の概念……平野絢子

——社会主義経済建設における

後進国型とその中国的展開(二)——

エルベ以东・上ラウズイツ地方の農村市場町(一)

……寺尾 誠

資 料

一八六六年から一八六八年に至る第一インター

ナショナルの総務委員会にかんする史料(その二)

……飯田 鼎

書 評

ハイマン・カプリン著

『アジアの革命家——片山潜の生涯』……飯田 鼎

熊谷尚夫著

『経済政策原理』——最近の類書も含めて——加藤 寛

ゴルドバーガー著

『エコノメトリックセオリー』……佐藤 保

新刊紹介

昭和四十年五月一日発行

◎三田学会雑誌 第五十八巻

定価 一〇〇円(送料別)

東京都港区芝三田二丁目二番地

慶應義塾経済学会

編集兼 代表者 遊 部 久 蔵

発行人 電話三田(43) 二二一一

印刷者 東京都港区芝三田豊岡町八番地

安 倍 七 郎

半カ年予約購読料(送料共) 七二〇円

一カ年 " " 一四四〇円

御希望の方は左記へ購読料を添え御申込み下さい。

東京都高輪局区内三田綱町一番地

発 売 所 慶 應 通 信

振替口座番号 東京一五五四九七

編 集 後 記

本号は、長い伝統ある三田学会雑誌のなかでも、一つの特異性をもっているように思われる。

それは、巻頭の飯田鼎氏の論説をのぞけば、そのすべてが若手の研究者、とくに助手(田中拓男氏を除く)の執筆になるものであり、いわば、助手特集号ともいふべきものであるからである。しかも、論説、資料・研究ノートのみならず、通常の紙教を大幅に上廻る力作であって、近年まれなる分厚な雑誌となっている。

実は、本年の一月から、毎月一回定期的に助手同士の研究の推進親睦をはかるために助手会を開催しており、いわば助手会の学問的成果の結実が、この号であるといつてもよいかもしれない。我々若い研究者達は、研究設備の改善、研究的雰囲気・環境の造成・整備、資料・情報の交換等々の目的をもって会合をつづけている。しかし、もつとも重要なことは、いう迄もなく、各自のたゆまぬ地道な研究であって、助手会の結成後、こんなに早く、まがりなりにも全員がなんらかの研究成果を発表できたことは、うれしい気がする。

量×質一定、であるとか、必ずしも量的な多さは質的な高さを示さないかもしれないが、各自の努力、皆様の御鞭撻・御支援によって、今後一層研究を進め、第二・第三の助手特集号を発行したいと考えている。

(深海)